

## 【書評】

**Ginette Michaud, *Lire dans la nuit et autres essais. Pour Jacques Derrida* (Les Presses de l'Université de Montréal, 2020)**

嶺村慧

闇に沈んだ部屋がある。そこでは誰かが、一筋の月明りを頼りに書物を読んでいる。淡い月光に照らされた文字が暗闇に浮かび上がる—そのようなイメージが鮮明に浮かんだのは、タイトルに含まれた「夜 *nuit*」という言葉に影響されたから、だけではないと思う。さらにこの暗い部屋のイメージは、修道士あるいは修道女の孤独な祈りをも連想させる。

「デリダのために」捧げられたこの著作のキーワードは詩であり、ごく単純化して言えば本書のテーマは「デリダと／における詩」ということになるのだろうが、一つの学術書であると同時に、あるいはそれ以上に、著者とデリダとの果たされなかった対話の痕跡であるようにも感じられるのである（その点、鶴飼哲氏による『ジャッキー・デリダの墓』や『いくつもの砂漠、いくつもの夜』と共鳴するところがあるように思われる）。

著者の Ginette Michaud は、現在カナダのモントリオール大学の名誉教授で、同校にて 30 年以上教鞭をとったフランス語文学研究者である。文学のみならず哲学や芸術などその学術的関心は広く、数多くの著作を発表している。デリダについて論じたものも多く、セミナー『偽誓と赦し』の講義録の校訂にも携わるなど、国際的なデリダ研究者の一人である。デリダが遺した膨大なテキストを渉猟し自らのエクリチュールを紡ぎ出す著者は、ジャック・デリダという哲学者の善き、あるいは忠実な遺産相続人と呼べるにちがいない。

本書を構成する 10 の論考は、その日付のもっとも古いものが 2002 年、新しいものが 2020 年となっており、そのことから明らかな通り、本書は著者の約 20 年に及ぶ研究の成果である。冒頭、Michaud 氏は、デリダがあらゆる形式及びジャンルのもとで「文学にもっとも関心を寄せてきた哲学者である」と断言する (7)。わけても詩に関する、あるいは詩という問いはデリダの関心を惹き続けたのであり、長きにわたり「あらゆる表現、あらゆる象徴化に抵抗するものに声を与えるべく詩人によって発明された固有語 *idiome* の可能性について思考を巡らせてきた」という。文学には、政治的主権の幻想について思考し、それを打ち砕く力が備わっている。このようなものとしてデリダは文学について考え続けていたのであり、彼がもつ文学への情熱に捧げられているのが本書に集められた論稿であると Michaud 氏は述べている (8)。そしてそれらのテキストをまとめる導きの糸、あるいは綴じ糸となっているのが文学であり詩なのである。

では本書の内容について簡単に紹介していくことにしたい。まず第 1 章及び第 2 章が内容的には一つのブロックになっており、前者では主にツェランとプリーモ・レーヴィが参照されながら（ラクー＝ラバルトやナンシーも繰り返し参照されている）、詩とは何か、という問いが取り組ま

れることになる。後者では、デリダが Emmanuel Hocquard と Claude Royet-Journoud の求めに応じて書いた一行詩「生命線から解き放たれるための祈り *Prière à desceller d'une ligne de vie*」の分析が行われる。想起と忘却の相反する呼びかけをする奇妙な祈りの構造が見出され、詩と記憶や生死の間いとの結び付きが示唆される。これら二つの章は、いずれも 2004 年（デリダが亡くなった年でもある）に最初のバージョンが発表されたようであるが、評者としては、ここに著者のデリダとの長い「対話」の始まりがあるのではないかと感じる。

第 3 章と第 4 章では文学と（来るべき）民主主義との関係が論じられる。前者においてはエレーヌ・シクスの『マンハッタン』を主な参照項としつつ、あらゆることを言うと同時に隠しもする文学の「力」と、権力（主権）と抵抗の関係性が問われることになる。第 4 章においてもシクスの作品を取り上げながら、今度は主体 *sujet* の分析（我有化の主体であると同時に他者に従属しているという二重性）から、作者 *auteur* の脱構築的分析が行われる。次いで第 5 章では文学の責任／無責任という問題が、アポリアと倫理の関係を糸口に、法や正義の問題系へと接続される。

第 6 章は表題にも採用されている「夜の中で読むこと *Lire dans la nuit*」で、著者はデリダの『条件なき大学』を反響させながら「条件なき文学」について論じていく。彼女によれば文学は、「真理について語ることなく、自然と制度の、自然と法の、自然と歴史の間にあるすべての伝統的な差異に疑義を呈する力をもつ」のであり（150）、「デリダの文学 *La littérature de Derrida*」は「果てしなく自らの位置をずらし続けるもの」なのである（152）。

第 7 章と第 8 章ではそれぞれ性差と歓待が中心的な考察対象となっており、デリダ的な新しい歓待のコンセプトの中心には詩的な発明が必要不可欠であるということが主張される。文学あるいは詩がもつ「すべての伝統的な差異に疑義を呈する力」の賦活、及びその（再）発明的な実践が、現実的な文脈においても重要な役割を果たすことが示されるが、このような実践の重要性は近年ますます高まっているように見え、その射程は現在より一層アクチュアルである。

第 9 章と第 10 章はいずれもアフォリズム的に書かれており、初出はそれぞれ 2014 年と 2005 年。前者は 10 の、後者は 25 の断章から構成されている。第 10 章では主として生き延び *survie* あるいは生と死の問題が中心に据えられていたが、第 9 章では、二つのテキストの間にはおよそ 10 年 *dix ans* という時間が経過していることをおそらく踏まえて、デリダの思想がもつ反時代性（あるいはそれは錯時性と呼ばれてもよいだろう）が論じられている。ここにはデリダの「不時のアフォリズム」の残響があるようにも見える。

以上きわめて大雑把にはあるが、本書の内容について概観してきた。本書が今後、デリダと詩について論じる際の必読文献の一つとなることは間違いないが、冒頭でも述べたように、評者にはこの著作自体が一つの対話の実践、もっと言えばある種の「喪の作業」のようにも感じられた。デリダを「読む」とはどのような営為であり得るか。その一つの応答が示されていると言えよう。